

# 日本語における強勢と作用域の 関係について

山 口 洋 輝

[キーワード：①主格目的語 ②作用域 ③強勢 ④情報構造 ⑤非頭  
在的移動]

## 1. はじめに

日本語の可能構文では、主語と目的語における格交替が容認される場合がある。また、格交替によって主語と目的語の作用域の変化が観察される。可能構文における格体制はいくつかのパターンがあり得るが、本稿ではまずデ格主語を取る場合に注目する。Takahashi (2021) によれば、主語がデ格で主語-目的語という基本語順を取る場合、目的語は主格であっても対格であっても狭い作用域になるとされるが、目的語に強勢を与えて読めば広い作用域が得られる。このような場合、本稿では目的語が非頭在的に移動して広い作用域を取ると考える。

強勢を与えられた要素が非頭在的に移動するという説は、Vallduví (1992, 1995) で提案され青柳 (2010) が日本語の分析に用いた情報パッケージ理論の観点からも支持される。青柳によれば、日本語には LF と異なる情報構造 (Information Structure, IS) に関する非頭在的部門を仮定する

必要があり、概略、IS レベルにおいて文頭に（ハによって）主題化された要素または焦点となる要素が無い場合文は不自然になる。よって、次のような wh 疑問文とその返答からなる会話（1）において、焦点となる要素が文頭に無い返答（1b）は不自然になると予測される。

- (1)      a. 何を太郎が食べたの？  
          b. # 太郎がそのピザを食べた。

（青柳 2010）

このような文は、どの要素にも特別強勢を置かず普通の読み方をする和不適切になるとされる。しかし、焦点要素に強勢を置いて読めば容認度が向上する。

- (2)      太郎がそのピザを食べた。<sup>1)</sup>

このような場合、表層語順は変化していないため（1b）と同様焦点要素が文頭に無く、情報パッケージの観点から不自然になると予測される。しかし実際には容認可能となり、このような容認度の変化についての説明が必要となる。そこで、非顕在的な IS レベルにおいて強勢を与えられた要素が文頭に移動すると考えることで情報パッケージ理論と整合的な説明が可能になる。

本稿は次のような構成になっている。2 節で可能構文における主語と目的語の作用域と格の関係について見る。3 節ではダケと強勢を与えられた要素の区別について論じる。本稿では作用域の分析を行う際、文中の要素にダケを付加した例文を用いるが、井戸（2015）を参考に、ダケと強勢を与えられた要素は区別可能であることを論じる。4 節では情報パッケージ

理論（Vallduvi1992, 1995）とその日本語における提案（青柳 2010）を見た上で、当該理論を援用して強勢を与えられた要素の分析を行う。

## 2. 可能構文における作用域について

### 2.1. 作用域と格の関係

日本語の可能構文では、主格目的語と対格目的語の両方が容認される場合がある。格交替が生じると、作用域の解釈に変化が生じる場合がある。まず、目的語の作用域に関して見ていく。主格目的語のときは広い作用域を取る解釈が、対格目的語のときは狭い作用域を取る解釈が優先的に出やすい（cf. Sano1985）。すなわち、概ね（3a）は（3a'）のような、（3b）は（3b'）のような解釈になる。

- (3) a. 太郎が勉強だけが続けられない。（ダケ>ナイ>ラレ）<sup>2)</sup>  
a'. 太郎が続けられないのは、勉強だけだ。（他のことは続けられる）  
b. 太郎が勉強だけを続けられない。（ナイ>ラレ>ダケ）  
b'. 太郎は勉強だけを続けるということができず、勉強中に漫画を読んだり音楽を聞いたり、他のことをしてしまう。

また、目的語の作用域は主語の格とも連動する。主語が主格のときは上記（3）のような解釈になるが、Takahashi（2021）では、主語がデ格のとき、主格目的語も狭い作用域を取るとされる。ただし、このようなデ格主語-主格目的語パタンの文において、主格目的語が広い作用域を取る解釈が可能だと判断する話者もある。よって、本稿ではデ格主語-主格目的語パタンの文における主格目的語は広い作用域と狭い作用域の両方の解釈が可能だとする。

- (4) 子供達で漢字練習だけが続けられない。(ナイ>ラレ>ダケ、ダケ>ナイ>ラレ)

また、Takahashi によれば、かき混ぜによって目的語の顕在的な移動が生じればデ格主語の場合でも目的語が広い作用域解釈を取ることが可能だとしている。

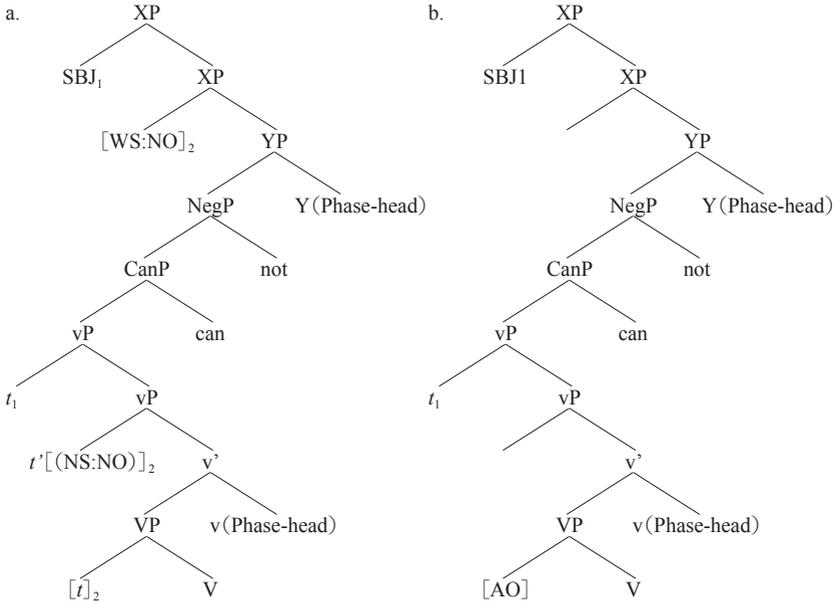
- (5) 漢字練習だけが子供達で続けられない。(ダケ>ラレ>ナイ)

このような主格目的語の作用域に関する振る舞いは、主語の移動と関連しているとされる。中野 (2019) では、可能構文の主語と目的語の格による作用域の違いを捉え得る構造 (6) が提案されている。中野によれば、目的語は動詞補部位置に基底生成され、その位置で対格を付与されるか vP 指定部位置に移動し主格を付与される<sup>3)</sup>。動詞補部位置に留まった場合狭い作用域解釈の対格目的語に、主格を付与された位置に留まった場合狭い作用域解釈の主格目的語に、主格を付与された位置から更に NegP より高い位置に移動した場合広い作用域解釈の主格目的語になるとされる。

中野が提案する可能構文の構造を以下に示す。

(6)

表 1 可能構文の構造



中野 (2019) より引用

本稿では中野が提案した (6) の構造を可能構文が持つと考える。このような構造を仮定することで、デ格主語の場合の目的語の作用域解釈について以下のように説明することができる。

Kishimoto (2010, 2012) や Takahashi (2021) によれば、主語はどの格であっても vP 指定部位置に基底生成され、主格主語はその後高い位置に移動するがデ格主語はその位置に留まるとされる。そのような違いから、次のような作用域解釈の差が生じる。(7a) の主格主語は否定より広い作用域を取るが、(7b) のデ格主語は否定より狭い作用域を取る。

(7) a. 先生達だけが歩かなかった。(ダケ > ナイ)

- a'. 歩かなかったのは先生達だけで、生徒達は歩いた。
- b. 先生達だけで歩かなかった。(ナイ>ダケ)
- b'. 先生達だけで歩いたのではなく、生徒達も一緒に歩いた。

(Takahashi2021)

(6a) の構造において、デ格主語は vP 指定部位置に留まり、主格目的語はデ格主語の下の vP 指定部<sup>4)</sup> で主格を付与されその位置に留まることでデ格主語と主格目的語の両方が狭い作用域を取る。ただし、かき混ぜによって顕在的に主格目的語がデ格主語を超えると、(5) のように主格目的語は広い作用域を取ることが可能になると考えられる。

しかし、(4) で示したように、かき混ぜを適用せずとも主格目的語が広い作用域を取る解釈が可能だとする話者もある。この点については4節で改めて論じるが、主格目的語が非顕在的に移動して広い作用域を取ることが可能であると考えられる。

ここで、尊敬語化テストによってデ格の場合でも主語と言えることを確認しておく。尊敬語化は主語のみに適用可能な操作で、目的語には適用できないことから主語性を確かめるテストの一つとして用いられる。

- (8) a. 田中先生が太郎をお叱りになった。  
b. # 太郎が田中先生をお叱りになった。
- (9) a. 田中先生が太郎にお話しになった。  
b. # 太郎が田中先生にお話しになった。

デ格要素にも次の (10b) ように尊敬語化を適用できることから、このデ格要素「先生達だけで」が (10a) の主格主語「先生達だけが」と同様

に主語であることが確認できる。

- (10) a. 先生達だけがお歩きにならなかった。  
b. 先生達だけでお歩きにならなかった。

以上の観察から、テ格主語も含めて主語は vP 指定部に基底生成され、主格主語は移動するがテ格主語は移動しないと考えられる。テ格主語のとき主格目的語が狭い作用域になるという現象は、テ格主語が移動せず vP 指定部に留まることによって目的語が主格を付与された位置からの移動を妨げられることが要因となっている。

以上で可能構文における格と作用域の関係について概観した。次項ではここまで狭い作用域解釈になるとした要素が、強勢を与えて読むと広い作用域解釈になる場合があることを見る。

## 2.2. 強勢を与えられた要素の作用域

既に見たように、主格主語-対格目的語の文は（特に強勢を置かずに）普通に読めば目的語は狭い作用域を取る。しかし、(11a) のように目的語に強勢を置いて読めば広い作用域を取ることが可能になる。この場合、ほぼ同じ意味の文として (12) のような分裂文に言い換えることができる。(12) は目的語に強勢を与えずに読んだ場合の主格主語-対格目的語の文 (11b) の言い換えとしては適切ではない。他方で (12) は、(11a) だけでなく目的語が広い作用域を取る主格主語-主格目的語の文 (11c) の言い換えとしても適切になる。このような分裂文との言い換えの観点からも強勢を与えられた対格目的語が広い作用域を取っていることが示唆される。

- (11) a. 子供達が漢字練習だけを続けられない。(ダケ>ナイ>ラレ)

- b. 子供達が漢字練習だけが続けられない。(ナイ>ラレ>ダケ)
- c. 子供達が漢字練習だけが続けられない。(ダケ>ナイ>ラレ)

(12) 子供達が続けられないのは、漢字練習だけだ。

強勢による作用域の変化はデ格主語の文においても観察される。

2.1 で、主語がデ格の場合目的語は格によらず狭い作用域解釈が可能であることを見たが、目的語に強勢を置いて読めば広い作用域を取る解釈が可能になる。(13a) では主格目的語が、(13b) では対格目的語が広い作用域を取る解釈のみが可能である。

- (13) a. 子供達で漢字練習だけが続けられない。(ダケ>ナイ>ラレ)  
b. 子供達で漢字練習だけを続けられない。(ダケ>ナイ>ラレ)

一方(14)のように、デ格主語は強勢を与えて読んでも広い作用域解釈を取ることができない<sup>5)</sup>。強勢を与えて読んでも(15)が言い換えとして適切になるような解釈が取れないことから広い作用域を取る解釈ができないことが分かる。

- (14) a. 子供達だけで漢字練習が続けられない。(ナイ>ラレ>ダケ)  
b. 子供達だけで漢字練習を続けられない。(ナイ>ラレ>ダケ)

(15) 漢字練習 {が／を} 続けられないのは、子供達だけだ。

(14a, b) でデ格主語が広い作用域を取る解釈、すなわち「子供達だけで漢字練習を続ける」ということはできないが、大人達だけで漢字練習を続け

るということでは可能」という解釈は、強勢によっても可能にはならない。以上の観察からデ格主語は広い作用域を取ることができないと考えると、(13) ではデ格主語は狭い作用域のまま強勢を与えられた目的語が広い作用域を取っていることになる。

(6) の構造を踏まえて論じたようにデ格主語が vP 指定部に留まることで目的語の移動が妨げられその時点の主語と目的語の位置関係によって作用域解釈が生じるとするならば、語順が変わらない (13) で目的語が広い作用域解釈しかできない点が問題となる。また、統語構造が語順に反映され、構造上の位置関係が作用域と関連するとするならば、(4) で主格目的語が狭い作用域を取ることができるとも問題となる。(4) ではかき混ぜも起こっていないため、構造上の位置関係と作用域が厳格に対応するとすれば主格目的語は狭い作用域のみ許すものと予測されるからである。

本稿ではこれらの問題に統一的な説明を与えるため、強勢を与えられれば目的語は非頭在的なレベルで主語を超えて移動し広い作用域を取ることができると主張する。

このような主張を支持する根拠として、4 節では情報パッケージ理論による日本語の分析を見る。4 節に進む前に、3 節でダケが付加された要素と強勢を与えられた要素の区別について論じる。

### 3. 強勢を付与された要素とダケを付加された要素について

2 節では強勢を与えられた要素について作用域の観点から見てきたが、強勢は一般に焦点標示の方法であるとされる。

また、日本語の作用域に関する先行研究の多くで、明確な判断を得るために分析の対象とする要素にダケを付加した例文が用いられる。本稿でもここまでの分析でダケを任意の要素に付加した例文を用いてきたが、ダケは焦点化辞として扱われる場合もあり、強勢を与えられたことでその要素

が焦点化されていると考えると、ダケを付加した要素と強勢を与えられた要素の区別が問題となる。3節ではこの問題について論じる。

ダケは焦点化辞として扱われることもあるとしたが、(16)のように、ダケを付加しただけで必ずその要素が広い作用域になる訳ではない。

- (16) a. 子供達が漢字練習だけ~~を~~続けられない。(ナイ>ラレ>ダケ)  
((11b) 再掲)
- b. 子供達で漢字練習だけ~~が~~続けられない。(ナイ>ラレ>ダケ、  
ダケ>ナイ>ラレ) ((4) 再掲)
- c. 子供達で漢字練習だけ~~を~~続けられない。(ナイ>ラレ>ダケ)

しかし既に見たように、目的語に強勢を与えると広い作用域解釈のみが可能な文となる。

- (17) a. 子供達が漢字練習だけ~~を~~続けられない。(ダケ>ナイ>ラレ)
- b. 子供達で漢字練習だけ~~が~~続けられない。(ダケ>ナイ>ラレ)
- c. 子供達で漢字練習だけ~~を~~続けられない。(ダケ>ナイ>ラレ)

このことから、(17) で広い作用域解釈を可能にし同時に狭い作用域解釈を排除している要素は強勢であると考えられる。

文における焦点要素とダケ句の区別を論じた研究として井戸 (2015) がある。井戸によれば、焦点要素は分裂文の前提部分に現れることはできないが、ダケ句は分裂文の前提部分に現れることもできるため、焦点要素とダケ句は区別可能だとされる。

- (18) a. 太郎はリンゴダケを食べた。

- b. リンゴダケを食べたのは、太郎だ。

(井戸 2015)

本稿では、既に強勢を与えた要素と分裂文との関係を見た。

(18) で示したように、通常狭い作用域解釈になる主格／対格目的語は強勢を与えられると広い作用域を取る解釈になり、分裂文「XはYだ」の「Yだ」の部分に現れる言い換えが適切になる。

このような分裂文との言い換える観点から、強勢を与えられかつ広い作用域解釈が可能になる要素は焦点だと考えられる。

井戸の主張に則れば、強勢を与えられ広い作用域解釈を取る要素が焦点だとすれば当該要素は分裂文の前提部分に現れることができず、「XはYだ」における「Yだ」の部分に現れなければ言い換えとして不適切になると予測される。実際に、次のような例で (20a) は (19) の言い換えとしては不適切である。(19) の言い換えとしては (20b) が適切な文となる。

- (19) 子供達が漢字練習だけを続けられない。

- (20) a. 漢字練習だけを続けられないのは、子供達だ。  
b. 子供達が続けられないのは、漢字練習だけだ。

更に、次のようなテ格主語の場合でもやはり強勢を与えられ広い作用域解釈を取ると思われる要素である目的語が分裂文の「Yだ」の部分に現れる言い換えが適切となる。

- (21) 子供達で漢字練習だけ {が／を} 続けられない。

- (22) a. # 漢字練習だけ {が／を} 続けられないのは、子供達でだ。  
b. 子供達で続けられないのは、漢字練習だけだ。

以上のような観点から、本稿では焦点要素とダケがついた要素は区別されると考える<sup>6)7)</sup>。

#### 4. 情報パッケージ理論を用いた強勢を与えられた要素の分析

##### 4.1. 情報パッケージ理論の概要

古典的な情報構造的観点からの分析において、文は主題 (topic) - 評言 (comment) や焦点 (focus) - 前提 (presupposition) といった二分法で捉えられる。しかし、Vallduví (1992, 1995) では文の情報構造を整理するにはこのような二分法では十分ではないとされ、(23) のような構造が提案された。

- (23) S = {FOCUS, GROUND}, GROUND = {LINK, TAIL}

すなわち、文 (S) はまず FOCUS と GROUND に分けられ、GROUND は LINK と TAIL に分けられるという三分法を用いた分析がここで提案されている。

このような分析は以下のような例文の分析の際に有効となる。(24) の文は、疑問文の形式によって強調する箇所を変えることでそれぞれに対する返答となることができる。このとき、(25b) に対する返答として “the car” を強調して (= 焦点要素として) 読んだとすると、二分法による情報構造の分析では “John” がトピック、“the car” が wh 疑問詞の返答となる焦点 (コメント) であるとして、動詞 “fix” が何に属するのかという問題が生じる。

- (24) John fixed the car.
- (25) a. Who fixed the car?  
b. What did John fix?  
c. What did John do to the car?

ここで、三分法による分析ならば以下のように捉えることが可能になるという利点がある。

- (26) ((25b) に対する返答の場合) [G [L John [T fixed]]] [F the CAR]<sup>8)</sup>.

このような Vallduví の情報パッケージ理論を発展させ、日本語の分析に用いたのが青柳 (2010) である。まず、青柳によれば、日本語において IS 部門を仮定する必要性はかき混ぜ (scrambling) られた要素が持つ情報構造的性質によって動機付けられる。

Saito (1989) では、(27a) のようなかき混ぜ操作を施した日本語の文で、かき混ぜによって顕在的に移動した要素は元位置で解釈されるため、「意味的に空 (semantically vacuous)」だとされた。(27a) は (27b) と同じ意味の文として解釈される。

- (27) a. ?どの本を [メリーが [[ジョンが図書館から ti 借り出した] か] 知りたがっている] (こと)  
b. [メリーが [[ジョンが図書館からどの本を借り出した] か] 知りたがっている] (こと)

しかし、青柳によれば、かき混ぜられた要素は情報構造的な観点からあ

る種の役割を担うため、全く意味的に空な操作であるとは言えない。疑問文における wh 疑問詞と返答における疑問詞の答えとなる要素は焦点となり、文頭位置にある方が自然な文となるとされる。

- (28) 何を太郎が t 食べたの？
- (29) a. そのピザを太郎 (?) が / は t 食べた<sup>9)</sup>。  
b. # そのピザは太郎が食べた。  
c. 太郎はそのピザを食べた。

(青柳 2010)

このような容認度の差が見られることから、青柳は IS を仮定する必要があるとする<sup>10) 11)</sup>。

また、青柳によれば、Vallduvi の提案では IS における分析の際 GROUND に含まれる LINK と TAIL が連続しない場合が生じ、表層構造 (Surface Structure, SS) と IS の構成素構造関係が恣意的になり得る点で問題がある。(24) を (25c) の返答と捉えた場合、Vallduvi の理論によれば次のような分析となる。(23) の分析によれば LINK と TAIL は GROUND を構成するが、これらは SS において連続しておらず、構成素を成していない。

- (30) [L John] [F fixed] [T the car].

このように GROUND を成すとされる LINK と TAIL が線形語順上分かれて現れてもよいなら、 $S = \{\text{FOCUS, LINK, TAIL}\}$  という平面的な表記法

でも問題無いはずであることから、Vallduvi による二段階の分割という発想を活かすため、青柳は情報パッケージの方法は (31) のように 2 通りあると考えることを提案している。

- (31) a. S=(FOCUS, GROUND)  
GROUND=(LINK, TAIL)  
b. S=(LINK, COMMENT)  
COMMENT=(FOCUS, TAIL)

このように考えることで、GROUND 要素が連続体を成していないと分析された (30) は以下のように分析可能となる。

- (32) [L John] [C [F fixed] [T the car]].

S=(LINK, COMMENT) の方法で情報パッケージされると考えることで、SS において連続する要素 (“fixed the car”) が IS における構成素 (COMMENT) を成すと分析される。

また日本語の主題化とかき混ぜについては情報パッケージの観点から (33) のように述べられるとしている。

- (33) a. 主題化 (topicalization)  
助詞ハを伴って文頭に基底生成される句は LINK をなす。  
b. かき混ぜ規則 (scrambling)  
かき混ぜ規則によって文頭に移動した句は FOCUS をなす。

(34) ((29) 再掲) と (35) ((30) 再掲) のような会話で、青柳によれ

ば疑問文 (34) における「何を」とその返答 (35) における答えとなる要素はかき混ぜられて文頭に移動し FOCUS と解釈される場合に自然な文となるが、FOCUS 要素ではなくハによって主題化された要素が文頭にある場合も容認可能であるとされる。文頭に FOCUS がある場合 (28a) の方法で、文頭にハを伴う句がある場合 (33b) の方法でパッケージされるとすると、それぞれの返答の IS は (36) のように分析される。

(34) 何を太郎が t 食べたの？

(35) a. そのピザを太郎 (?) が / は t 食べた。

b. # そのピザは太郎が食べた。

c. 太郎はそのピザを食べた。

(36) a. [F そのピザを] [G [L 太郎は] [T 食べた]]。

b. [L\* そのピザは] [G 太郎が食べた]。

c. [L 太郎は] [C [F そのピザを] [T 食べた]]。

このように、適切な返答である (35a) 及び (35c) はそれぞれ (36a) (36c) のように適切に情報パッケージされていると分析される。また、(36b) では焦点となるはずの要素が主題化によって LINK になっていると分析され矛盾が生じるため、容認度の低さを捉えることができる。

以上が青柳 (2010) における情報パッケージ理論の改訂案及び日本語に関する提案の概要である。次項では、本来不適切な文が強勢を与えられることで容認可能となるケースを、非顕在的移動を仮定することで情報パッケージの観点から正しく分析できることを見る。

#### 4.2. 強勢を与えられた要素の分析

青柳 (2010) では検討されていない文だが、疑問文 (34) に対して (37) と返答することは、青柳の理論によれば IS の観点から不自然になると考えられる。

(37) # 太郎がピザを食べた。

この文の IS について、 $S = \{\text{FOCUS}, \text{GROUND}\}$  の方法でパッケージされると考えると、「ピザを」が FOCUS となり文頭にないため不適切となる。 $S = \{\text{LINK}, \text{COMMENT}\}$  の方法によるパッケージを考えると、文頭の「太郎が」が主題化されていないため LINK と解釈できず、不適切になる。

しかし、この場合に疑問文における wh 疑問詞の答えとなる要素に強勢を置いて読むと、容認度が向上すると思われる。

(38) 太郎がピザを食べた。

強勢を与えただけでかき混ぜ等の操作による顕在的な移動は起こっていないため、この容認度の向上を IS の観点から説明するためには、非顕在的な移動を考える必要がある。

2 節で強勢を与えられた要素が非顕在的に移動すると提案したが、ここで同様に強勢を与えられた「ピザを」が (39) のように文頭に移動すると考える。このように仮定すると、IS レベルで  $S = \{\text{FOCUS}, \text{GROUND}\}$  という情報パッケージ的に適切な分析が可能となる。

(39) [F ピザを [G 太郎が食べた]]

青柳は SS と IS との整合性を考慮し (33) のような分析を提案したが、本稿で論じてきたように語順は変わらずに強勢のみによって容認度が変化する場合がある。そのような場合に非顕在的移動を仮定することで (39) のように青柳の理論と整合的な分析が可能になることから、青柳の提案するパッケージ方法と非顕在的移動の仮定の両方が IS レベルにおける分析に必要であると考えられる。

ここまでの分析をまとめると、wh 疑問詞を含む疑問文とその返答のペアの容認度は次のようになると考えられる。

- (40) a. # 太郎が何を食べたの？  
b. 何を太郎が食べたの？ ((34) 再掲)
- (41) a. # 太郎がピザを食べた。((37) 再掲)  
b. 太郎がピザを食べた。((38) 再掲)  
c. ピザを太郎が食べた。

このような観察を踏まえ、同様の分析を可能構文でも行う。

wh 疑問文とその返答を分析対象とし、疑問文では wh 疑問詞が元位置にあるものと wh 疑問詞をかき混ぜたものを比較する。返答文は wh 疑問詞の答えとなる要素が元位置で強勢を受けないもの、元位置で強勢を受けもの、かき混ぜたものを比較する。

まず、対格目的語の場合を考える。対格目的語の場合、主語が主格でもデ格でも同様の容認度となる。疑問文は、wh 疑問詞を文頭にかき混ぜた (42b) (44b) がそれぞれ (32a) (44a) より適切に感じられる。返答は、答えとなる要素が元位置にあり強勢を受けない (43a) (45a) が不適切で、元位置で強勢を置かれるかかき混ぜられた (43b) (43c) (45b) (45c) が

自然となる。

・主格主語-対格目的語

- (42) a. #子供達が何を続けられなかったの？  
b. 何を子供達が続けられなかったの？
- (43) a. #子供達が漢字練習を続けられなかった。  
b. 子供達が漢字練習を続けられなかった。  
c. 漢字練習を子供達が続けられなかった。

・テ格主語-対格目的語

- (44) a. #子供達で何を続けられなかったの？  
b. 何を子供達で続けられなかったの？
- (45) a. #子供達で漢字練習を続けられなかった。  
b. 子供達で漢字練習を続けられなかった。  
c. 漢字練習を子供達で続けられなかった。

(42) (43) の IS の分析を以下に示す。

- (46) a. [G\*子供達が] [F何を] [G続けられなかったの？]  
b. [F何を] [G子供達が続けられなかったの？]
- (47) a. [G\*子供達が] [F漢字練習を] [G続けられなかった]。  
b. [F漢字練習を] [G子供達が続けられなかった]。  
c. [F漢字練習を] [G子供達が続けられなかった]。

テ格主語-対格目的語の (44) (45) の分析を以下に示す。

- (48) a. [G\*子供達で] [F何を] [G続けられなかったの?]  
b. [F何を] [G子供達で続けられなかったの?]
- (49) a. [G\*子供達で [F漢字練習を] [G続けられなかった]。  
b. [F漢字練習を] [G子供達で続けられなかった]。  
c. [F漢字練習を] [G子供達で続けられなかった]。

次に主格目的語の場合について見る。主語と目的語がどちらも主格となる二重主格構文は一つ目の主格要素が総記 (cf. 久野 1973) の解釈を受けるといふ情報構造的に他とは異なる性質を持つため、本稿では考察対象から除く。よって、ここではテ格主語-主格目的語のパターンを考察する。

・テ格主語-主格目的語

- (50) a. #子供達で何が続けられなかったの?  
b. 何が子供達で続けられなかったの?
- (51) a. 子供達で漢字練習が続けられなかった。  
b. 子供達で漢字練習が続けられなかった。  
c. 漢字練習が子供達で続けられなかった。

このパターンは、返答文である (51) の内、答えとなる要素が元位置で強勢を受けない (51a) が容認される点で対格目的語の例とは異なっている。(51a) が容認可能であることについて、主格目的語は強勢を置かれなくても焦点的解釈を得やすいという性質があり、それによって容認可能に

なっていると考えられる。

2節では主格目的語と対格目的語の作用域について論じたが、主語が主格で目的語の移動を妨げる要素が無い場合、主格目的語は強勢を与えなくても移動するが対格目的語は強勢を与えなければ普通基底位置に留まると分析した。

このような分析から示唆されるように、主格目的語と対格目的語で移動に関する性質が異なり、主格目的語は移動しやすい要素であるとするれば、(51a) が対格目的語の (43a) 及び (45a) より容認度が高いことはこのような性質の違いに由来している可能性がある。

以上の議論を踏まえると、(51a) の「漢字練習が」も強勢を置かれた場合の文 (51b) のように非顕在的に移動することで (52) のような IS を構成し、容認可能な文となっている可能性がある。

(52) [F 漢字練習が [G 子供達で続けられない]]。

強勢を置かなくても非顕在的移動が生じ (52) のような IS を構成するならば、強勢を置かない場合でも広い作用域解釈が可能であるはずである。すなわち、もし上述したような性質の違いが主格目的語と対格目的語の間にあるとすれば、主語がデ格で主語-目的語語順の場合に、対格目的語は広い作用域解釈が難しいが主格目的語の場合は比較的広い作用域解釈が出やすいという判断が得られる可能性がある。実際、(53) ((4) 再掲) は主格目的語の広い作用域解釈が可能であり、(54) ((22b) 再掲) との言い換えが可能である。

(53) 子供達で漢字練習だけが続けられない。

(54) 子供達で続けられないのは、漢字練習だけだ。

(53) の (54) のような解釈が可能であることから、テ格主語-主格目的語の可能構文において、主格目的語は強勢を与えずとも広い作用域解釈を取り得ると考えられる。このことはまた、主格目的語が対格目的語に比べて非顕在的に移動しやすい要素であることを示唆する。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、顕在的レベルでは移動を妨げる要素によって移動せず狭い作用域を取る要素が、強勢を置かれることで作用域が広がる場合があることから、非顕在的に移動している可能性について論じた。Vallduvi、青柳によって提案、改訂された情報パッケージ理論を用いることで非顕在的レベルでの分析が可能であることを示した。

脚注 10 で論じたように、本稿で分析に用いた強勢の付与やかき混ぜを行った日本語の wh 疑問文の容認度は話者によって差があり、容認度がクリアに出る例文や文脈を慎重に考慮する必要がある。今後より大規模な調査を行うことで、理論の精緻化を目指したい。

### 参考文献

- 青柳宏 (2010) 「日本語におけるかき混ぜ規則・主題化と情報構造」、長谷川信子 (編) (2010) 『統語論の新展開と日本語研究』所収、193-225、開拓社。
- Chafe, Wallace L. (1976) “Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics and Point of View” in Li, Charles N. (ed) (1976) *Subject and Topic*, 27-55, Academic Press, New York.
- 井戸美里 (2015) 「とりたて詞ダケにおけるとりたてのフォーカスと談話のフォーカス」、『言語学論叢』34、71-83、筑波大学一般・応用言語学研究室。
- Kishimoto, Hideki (2010) “Subjects and constituent structure in Japanese” *Linguistics* 48 (3), 629-670.
- Kishimoto, Hideki (2012) “Subject honorification and the position of subjects in Japanese” *Journal of East Asian Linguistics* 21 (1), 1-41.

- Kiss, Katalin E. (1998) “Identificational Focus Versus Information Focus”, *Language* 74 (2).
- 北川善久 (2010) 「日本語の焦点に関する主文現象」、長谷川信子 (編) (2010) 所収、269–300、開拓社。
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店。
- 三原健一 (2023) 「日本語のかき混ぜ操作—談話構造の観点から—」、『京都ノートルダム女子大学研究紀要』53、53–63、京都ノートルダム女子大学。
- 中村浩一郎 (2011) 「トピックと焦点—『は』と『かき混ぜ要素』の構造と意味機能—」、長谷川信子 (編) (2011) 『70年代生成文法再認識 日本語研究の地平』所収、207–230、開拓社。
- 中野晃希 (2019) 「日本語の主格目的語に見られる作用域の不一致に関する一考察」日本言語学会第159回大会予稿集、194–200。
- Pesetsky, David (1987) “Wh-in-situ: Movement and unselective binding” In E. Reuland and A. ter Meulen (eds.), *The representation of (in) definiteness*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rooth, Mats (1992) “A Theory of Focus Interpretation” *Natural Language Semantics* 1, 75–116.
- Saito, Mamoru (1989) “Scrambling as Semantically Vacuous A'-movement” In Baltin, Mark R. and Kroch, Anthony S. (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182–200. University of Chicago Press, Chicago.
- Sano, Masaki (1985) “LF movement in Japanese” In *Descriptive and Applied Linguistics* 18, 245–259, International Christian University.
- Takahashi, Masahiko (2021) “Some notes on the scope properties of nominative objects in Japanese” In Laszakovits, Sabine and Shen, Zheng (eds.) (2021) *The size of things I: Structure building*, 153–171. Berlin: Language Science Press.
- Vallduví, Enric (1992) *The Informational Component*, Garland, New York.
- Vallduví, Enric (1995) “Structural Properties of Information Packaging in Catalan” In Kiss, Katalin É (ed.) (1995) *Discourse Configurational Languages*, 122–152. Oxford University Press, New York.
- Zushi, Mihoko (2016) “Case and predicate-argument relations”, In Fujita, Koji and Boeckx, Cedric (eds.), *Advances in biolinguistics: The human language faculty and its biological basis*, 46–66. London and New York: Routledge.

## 注

- 1) 本稿では下線と太字の併用によってその要素が強勢を与えられたものであることを示す。
- 2) 作用域の分析の際、ダケはダケが付加した要素、ナイは否定、ラレは可能接辞の作用域を示すものとする。ここでは「勉強だけが」が最も広い作用域を取ることを意味する。
- 3) 中野 (2019) 及び本稿で採用する特定の要素との併合の際に構造格の付与が行われるという構造的格付与の理論の詳細については Zushi (2016) を参照されたい。
- 4) このような記述では vP 指定部が複数あると仮定することになるが、本稿では指定部が複数あり得るかどうかについては深く踏み込まない。VP 補部に基底生成された目的語が基底生成位置で対格を付与されず、vP 周縁部に移動したとき主格を付与されるという仮定がここでは重要となる。
- 5) ここで、デ格主語には強勢を与えるだけでなくダケを付加しているが、ダケの付加は作用域解釈の分析の際に問題にはならないため、強勢を与えて読んでも広い作用域を取らないと考える。強勢を与えられた要素とダケが付加した要素に関する詳細は 3 節で述べる。
- 6) 焦点という概念に関して、例えば北川 (2010) で採用されているような Chafe (1976) や Rooth (1992) を基とする「ある選択肢が『ほかの選択肢の集合 (set of alternatives)』という概念を喚起する場合の呼び名」であるとする考え方がある。ダケはそれが付加した要素を含む集合の他の要素についての含意を含むので、このような定義付けによれば焦点化辞と見なされ得る。
- 7) ここで論じたテストにパスしないことは必ずしも直ちにその要素が焦点でないことは意味しない。(14) のデ格主語は強勢を与えても広い作用域を取らないことを見たが、wh 疑問文における wh 疑問詞の返答となる要素になる文脈を与えれば焦点となる。
- 8) 以下、IS レベルの分析の際には (26) のように FOCUS, GROUND, LINK, TAIL, COMMENT の頭文字を用いる。
- 9) 青柳の判断では疑問文で既出の情報であるため「太郎は」とした方が自然だが、ガでも容認可能とする話者がいるとされる。
- 10) 一般的に日本語は wh-in-situ 言語 (cf. Pesetsky 1987) であるとされ、wh 疑問詞が元位置から移動せず疑問文を作ることができるとされる。しかし、

文脈によっては青柳による (28) や (29a) のような文が最も自然になると思われる。

例えば、テーブルに置いておいたはずのピザがないことに気付き、「太郎がピザを食べてしまったのだろう」という推論を行った A の独話と、それを聞いて何を太郎が食べたのか気になって聞いた B の疑問文、それに対する A の返答という一連の談話を考える。

A: (独話) 太郎が食べたんだろうな。B: 何を太郎が食べたの? A: ここに置いておいたピザを太郎が食べた (んだよ)。

青柳の理論によれば (28) の返答として (i) 「太郎がそのピザを食べた。」は不適切になると予測されるが、具体的な文脈の想定無しに (28) との会話を想像すると (29a) と (i) の差が感じられないとした話者からも以上のような文脈を想定すると (29a) が自然になるとの判断が得られた。このような観察を踏まえて、本稿でも青柳の判断を妥当なものとして論を進める。

- 11) 中村 (2011) や三原 (2023) によれば、かき混ぜによって要素が文頭に移動した場合、当該要素は排他的識別焦点 (identificational focus (cf. Kiss1998)) となり、「他の候補となる要素については、そうではない」というような他の候補に関する否定的な含意が生じるとされる。すなわち、中村によれば次の (ii a) に対して (ii b) と返答したときは排他的識別焦点とはならず、(ii c) を後続させることができるが、(iii a) に対して (iii b) と返答したときは文頭に移動した「レッドソックスを」が排他的識別焦点と解され、(iii c) のような文を後続させることは難しいとされる。同様に三原の例 (iv) では A に対して B のように返答したとき、「太郎は他のグループは応援していない」という含意が生じるとされる。

- (ii) a. 太郎はメジャーリーグのどこを応援しているの?  
b. 太郎はレッドソックスを応援している。  
c. でも太郎はマリナーズも応援している。
- (iii) a. メジャーリーグの中でどこを太郎は応援しているの?  
b. レッドソックスを太郎は応援している。  
c. でも太郎はマリナーズも応援している。

(中村 2011)

- (iv) A: 大輔はどのグループを応援してるんだろう?

B: AKB を、あいつ、応援してる。

(三原 2023)

このようにかき混ぜられて移動した要素がある種の含意を有することからも、青柳が提案する IS の仮定が支持される。

On the Relation between Stress and Scope in Japanese

YAMAGUCHI, Hiroki

Case alternation of subjects and objects can occur in potential constructions in Japanese. When case alternation occurs, subjects and objects change their scope. Normally, nominative objects take wide scope but if a subject remains in spec-vP nominative objects can't move up and take narrow scope. However, if nominative objects receive stress it can take wide scope. In this case, a subject remains in spec-vP but objects move up covertly. Such cases can be analyzed properly by "Information packaging theory", which is suggested by Vallduví (1992, 1995) and applied to Japanese by Aoyagi (2010).

(日本語日本文学専攻 博士後期課程 3年)